

論文審査要旨及び担当者

報告番号 甲 乙 第 号 氏名 川澄 哲夫

論文審査担当者

主 査 慶應義塾大学文学部教授 唐須教光  
文学研究科委員、Ph.D.

副 査 慶應義塾大学文学部教授 巽 孝之  
文学研究科委員、Ph.D.

副 査 東京都立大学人文学部教授 高山 宏  
学識確認 慶應義塾大学文学部教授 唐須教光

論文題目 日米交渉史から見た英学史研究

川澄哲夫君の博士号請求論文として提出された主論文および副論文、参考論文の内訳は、下記のとおりである。

<主論文>

『資料日本英学史 第一巻（上）英学ことはじめ』（大修館書店、1988年2月20日発行）

『資料日本英学史 第一巻（下）文明開化と英学』（大修館書店、1998年6月1日発行）

<副論文>

『資料日本英学史 第二巻 英語教育論争史』（大修館書店、1978年6月1日発行）

<参考論文>

『増補改訂 中浜万次郎集成』（小学館、2001年12月10日発行）

本研究は、英学史上において庶民が果たした役割に新しい光をあてて、一切の孫引きを排除し、内外の確実な資料のみを駆使しつつ、英学の歴史を系統的に跡づけることを試みたものである。論文表題「日本英学史」は、「資料」という言葉を冠しているが、それはただ単に英学の研究者たちの便宜を図り、各所に散在する原資料を渉獵し、それを機械的に列挙しただけのものではない。すべての資料を、それぞれの時代背景と関連させ、当時の日本人および日本の社会にとっての意味を考え、整理したものである。いわば資料に英学の歴史を語らせるという方法論そのものに、川澄君の独自性が込められている。

## < 論文概要 >

主論文である『資料日本英学史』第一巻は全十七章、全二巻構成。

上巻の「英学ことはじめ」は、1600年（慶長五年）、ウィリアム・アダムズが豊後の国臼杵湾佐志布の海岸に漂着した年に始まり（序章）、幕末にペリーが来航する前夜で終わる。その中心はあくまでも「英学」（第三、四、六章）ではあるが、封建社会における英学の位置づけを明確にするために、「蘭学」（第一、五章）および「魯西亜学」（第二章）にも多くの紙幅が割かれている。

下巻「文明開化と英学」では、1853年（嘉永六年）から明治末までのおよそ半世紀にわたる英学の盛衰が中心となる。ペリー艦隊来航時から夏目漱石がラフディオ・ハーンに代わって東京帝国大学講師になるまでの時期である。

下巻冒頭の第七章では、アメリカの鯨捕りと日本の漂流民という庶民が、幕末の日米交渉の舞台で、際だった役割を果たしたことが、内外の資料によって裏付けられている。この点は、従来、英学史のみならず、幕末における日米交渉史においても、その重要性が看過されてきたところである。

第八章では、ペリーが来航して、英語がまず外交交渉において重要な道具となったことに注目している。アメリカの鯨捕りから英語を学んだオランダ語の通詞たちの英語力が明晰に分析されている。

第九章、第十章では1860年（安政六年）、幕府が、開国後海外に派遣した第一回遣米使節をとり上げ、一行の夷情探索と夷狄感克服の問題を考察している。この時、福沢諭吉は、咸臨丸でサンフランシスコまで渡航している。

第十一章では、幕末における福沢諭吉の思想と行動および二人の漂流民が諭吉に及ぼした影響が論証される。第十二章では、明治初年において慶應義塾が日本の近代化に果たした役割が考察される。第十三章では明治期における官学の英学が、第十四章では明治初期の英学私塾の果たした役割が再検討される。

ペリー艦隊が来航して、日本が開国し、文明開化を象徴する「英学」という言葉がさかんに用いられるようになった。なにより重要なことは、庶民が英語を学んでも、「ねぢけびと」と呼ばれることもなくなったことである。しかし日本人と英語のとりくみ方は多様であり、第十五章ではその多様な側面を、全体像として捉えている。教師および英学者としての夏目漱石には、独立した一章が割かれ、それが本書全体の実質的な終章となっている。

以上が主論文『資料日本英学史』第一巻上・下の構成のあらましである。上巻「英学ことはじめ」では「英学」「蘭学」「魯西亜学」が骨子を成すのに対し、下巻「文明開化と英学」では「鯨学」と「英学」および「福沢学」が骨子を成しているのがわかるであろう。以下、本研究がとりわけ現代に向けて最大の意義を持ちうると確信される下巻、つまり第七章から第十五章に焦点を絞り、より詳細な要旨説明を試みる。

## 第七章 鯨捕りと漂流民たち

下巻「文明開化と英学」の冒頭の章で、アメリカの鯨捕りと日本の漂流民という庶民が、日本開国の原動力となったことを内外の確実な資料によって論証した。このことを理解するためには、アメリカの捕鯨史についての知識が欠かせない。漂流民の中では、中浜万次郎が開国に果たした役割は大きい。アメリカのペリー研究者たちは、こぞって、万次郎を日本開国の立役者の一人として挙げている。さらに、アメリカ政府が、日本遠征を実行に移す直接のきっかけとなったのは、マンハッタン号事件とプレブル号事件という日米の漂流民送還問題である。また、ペリーは日本情報の収集のみならず、幕府との交渉にも、アメリカの鯨捕りを十分に活用している。

## 第八章 それぞれの異文化体験

ペリー艦隊が来航すると、英語が外交交渉の上で、欠かせない道具となった。しかし日米の正式な交渉はオランダ語で行われている。日本側の主席通詞・森山栄之助が、アメリカの鯨捕りラナルド・マクドナルドから英語を学んだことはよく知られている。しかし森山の英語は、まだ外交交渉に役立つほどの水準には達していなかった。万次郎は、「如何様入組」んだ交渉にも応じられるほどの英語を身につけていたが、彼が通訳することは、水戸斉昭の反対にあって、実現しなかった。この章では、アメリカ人と日本人のそれぞれの異文化体験についても触れられている。

## 第九・十章 夷狄感克服へ、試練の旅

遣米使節一行は、咸臨丸グループを合わせると 173 名、その中に、福沢諭吉のような下級武士や姓をもたない大工、水夫、火焚などの庶民が多数含まれていた。幕府としては、この機会を利用して、夷情を探索し、「わが国に一大革命を行なおう」と考えていたのであるが、多くの目付を同行させている。しかし英語のできる者は一人もいないという有様であった。

第九章では、副使の村垣淡路守と玉虫左太夫の二人を中心として、「夷狄感克服」への旅の様子を描いた。

第十章では、このドン・キホーテ的夷情探索の旅において、アメリカで彼らが見聞した文明の利器、遊芸・芸術、衣食住、習俗・人情、大統領や女性の地位など西洋事情全般にわたって検証した。

## 第十一章 幕末の福沢諭吉

1854 年(安政元年)、数え年 21 歳になった福沢諭吉は故郷をとびだした。親

の敵ともいえる門閥制度の厳しい中津の「窮屈なのが忌で忌で堪ら」なかったのである。ペリー来航が、下級武士の家に生まれた福沢に、世に出る機会を与えたのであった。その後、長崎から適塾とみっちり蘭学を修業し、江戸に出て中津藩中屋敷内に蘭学塾を開いた。こうして諭吉は門閥社会の外へ出て、なんとか蘭学に生き甲斐を見出すことができるようになっていた。ところが、1859年(安政六年)の横浜体験によって、蘭学が古い道具になっていることを知り、英学に転ずるのである。その福沢に、アメリカへ渡航する機会が訪れた。咸臨丸での旅である。ここで諭吉は中浜万次郎と出会う。この万次郎の影響を通じて、福沢はアメリカが門閥制度のない国であることを実感する。次いで、福沢はヨーロッパへ渡航する機会を掴んだ。ここでも「土農工商の差別がなく、自由に天賦の才を伸ばすことができる」ことを知る。こうして日本の封建社会の末端で苦しむ人たちの解放へと心に向け、行動を開始する。帰国後は、著作と塾の経営に心血を注ぐ。1865年(慶應二年)には、『西洋事情』の初編の翻訳が完成する。幕末の福沢の思想と行動に影響を与えたのは、万次郎と音吉という二人の漂流民であった。

## 第十二章 慶應義塾の成立

1867年(慶應三年)、福沢諭吉は、再度アメリカへわたった。ワシントン滞在中、独立宣言の草稿を見たり、大統領ジョンソンが一人で散歩しているのに出会う。

今度の福沢のアメリカ土産は、多数の英書であった。従来 of 西洋の学問は、自然科学に限られていたが、「西洋の学問を社会の人事に通用せん」として、歴史、政治、経済に関する書物を求めて帰ってきたのである。英学が封建社会から解放される、これが第一歩となる。

1867年(慶應四年)、福沢諭吉は、塾を鉄砲州から芝新銭座に移し、慶應義塾と名付けた。その結果福沢は中津藩から独立し、英学は、封建社会から解放され、鎖国以来初めて、庶民の手にするところとなった。これ以後、福沢は、英学を中心において、慶應義塾の改革を、つぎつぎと断行していった。

## 第十三章 明治の官学

1869年(明治二年)正月、開成学校では、英語学と沸語学の授業が始まった。教授の一人に中浜万次郎が就任し、学生は「農商たりとも有志の者」が入学を許された。開成学校は大学南校、南校、第一大学区第一番中学と名称が変わっていく。そして1873年(明治六年)に、再び開成学校となると、「英学本位体制」が採用された。英語が、高等教育を受けるための欠かせない道具となったのである。「英学本位体制」を受けて、東京、愛知、大阪などに、英語学校が

できた。

1877年(明治十年)に、東京大学が創設されると、東京英語学校は東京予備門に解消された。この予備門の学科課程も、1881年(明治十四年)9月期から、徐々に変化し始める。生徒が「外二明カニシテ内二暗」い弊害をなくすため、「修身学」と「本朝歴史」が加えられる。その上、「英語ヲ廃シ邦語ヲ用ヒル」方向へと向かっていった。明治十四年の政変直後で、井上毅による反福沢的儒教的教育政策によるものであった。

#### 第十四章 明治初期の英学私塾

日本における英学私塾の淵源は、神奈川の成仏寺に見出すことができる。1859年(安政六年)、伝道のために来日したヘボンを始めとして、ブラウン、ジェームズ、バラなどが、宣教の傍ら、そこで英語を教えたのである。村田蔵六、高橋是情、大槻文彦なども、彼らから英語を習った。

1871年(明治四年)、慶應義塾が三田に移転する前後から、おびただしい英学私塾が誕生した。主なものとしては箕作秋坪の「三叉学舎」、尺振八の「共立学舎」、佐野鼎の「共立学校」、中村正直の「同人社」などが挙げられよう。英学私塾は、1873,4年(明治六、七年)を頂点として全盛を誇ったが、個人的な経営基盤が脆く、明治政府の学制が整備されてゆくにつれて衰退してゆく。

#### 第十五章 文明開化と英学

英語英学万能の時代である。しかし英語への関わり方は、人によってさまざまであった。横浜の商人たちは、「貿易通語」を駆使して、外国との貿易に携わった。一般庶民にとっては、英語は文明開化の大切なアクセサリーのひとつとなった。この新しい時代に志を得ようとする者は、だれもかれもが一斉に英学に向かった。なにしろ「片言の横文字許でさへ、人才登庸の有力の条件」とされ、「バーレーの万国史を読む者は、世界の事情に精通せる者と看做」され、「ウェーランドの経済学を半分解るものは国事を委るに足る者」と考えられた。

この時期に、福沢諭吉、岡倉天心、新渡戸稲造、内村鑑三、坪内逍遙、夏目漱石なども英語を学び、英語を自在に操る力を身につけた。しかし彼らはその英語力をそれぞれ異なる用途に用いている。岡倉、新渡戸、内村などは、日本人として日本流に英語を使いこなし、「日本人と日本文明を西欧」に紹介したが、他方、逍遙や漱石は、英文学研究のために、英語を利用したのである。

#### 終章 明治の英語教師・夏目漱石

逍遙と同じように、漱石も英語力を英文学研究の手段として用いるという、

本場の英語から離れることを許されない運命を選んだ。

大学では、英文学を志したが、わからずじまいで、世に出て、英語教師になった。彼の英語は、予備門、大学を通じて抜きこんでいたことが知られている。

英語教師としては、ある時は綿密に、ある時は達意を主とした教え方で、発音なども正確を旨とし、少しのごまかしも許さない。

ところが、漱石が本場イギリス英語に接したときのあわてぶりは滑稽なほどであった。面識のある夫人のクィーンズ・イングリッシュを耳にして狼狽し、羨望し、「英語二巧ミナリトテ賞賛」されて赤面する。彼の英語は「達人の域に達」していた筈である。留学地もエジンバラは、英語が「仙台弁」のようだと避け、ロンドンを選ぶのだが、そこでは「江戸っ子のベランメー」ともいえるコックニーに閉口する。二年の留学期間中、「無弁舌なる英語」でイギリス人との交際もままならなかった。

漱石は英文学の研究では、「自己本位」という言葉を自分の手に握ってから大変強くなった。ところが、英語の問題では、あくまでも「他人本位」で、彼の不安は消えることはない。漱石にして、英語は「江戸前の日本人の英語」から抜け出すことはできなかったのである。

結局、「教場で英語を教えることが面倒」になり、漱石は「大学も高等学校もやめに致して新聞屋」になった。

以上が主論文『資料日本英学史』第一巻の要旨と意図である。上巻「英学ことはじめ」が 925 ページ、下巻「文明開化と英学」が 1366 ページ、合計 2291 ページの莫大なる分量に達している。しかも、すべての資料には、その背景に適する見出しが付されている。

捕鯨民と漂流民という、どちらかといえば、近代における日米交渉史において看過されてきた庶民の役割に焦点を合わせ、それを中心に据えて、全体を構成し、内外の確実な資料のみによって裏付けた本書は、川澄君が四半世紀近くの歳月をかけて完成した業績であり、以後、何らかのかたちで日米交渉史に関心を持つ者には決して避けて通れない必須文献として、すでに学界的評価は定まっている。そのことは、1988年10月16日付で、主論文の上巻と副論文『英語教育論争史』を中心とする研究に対し、日本英学史学会（高梨健吉会長）より優れた英学史研究を表彰する豊田実賞が贈られていることから、容易に推察されるであろう。また、参考論文として提出された『中浜万次郎集成』に対しても、1990年10月13日付でアメリカのケンダール捕鯨博物館より第六回L. パーン・ウォーターマン賞を、1991年4月6日付で、高知市文化振興事業団（山岡亮一理事長）より第一回高知出版学術賞を授与されていることも、川澄君の

一貫した研究が、すでに国内的にはもとより国際的にも広く認知されていることの証といえるであろう。

### < 審査要旨 >

以上の川澄論文に関して、審査委員会は2002年10月28日(月)夕刻、三田校舎研究室棟にて会議を開き、徹底的に検討した。四半世紀近くの長い歳月にわたって構築された同論文はすでに多くの書評で高い評価を与えられ( < 英語教育 > 1998年11月号、 < 日本歴史 > 1999年12月号ほか)、論文概要の末尾でもふれたとおり、それにふさわしい栄誉も獲得してきたが、その役割は決して終わったわけではなく、いまでこそ同書をほとんど教科書のようにして用いてセミナーを行い、そこから新たな研究の萌芽を示しているところも、東京大学大学院をはじめ少なくない(その成果として斎藤兆史『英語襲来と日本人』[講談社選書、2001年]参照)。だが、審査委員一同は、そのような水準とはまた別の視点から、本書が博士論文に価するかどうかを、きわめて慎重に、じゅうぶんな時間をかけて論議した。

まず、審査委員会がおおむね一致を見た長所について、要約する。

1. 従来の英語書誌をまず捨てて、自らの立場から資料を再編成した。
2. 英学だけではなく、蘭学、ロシア学の立場からも英学を見直した。
3. 体制維持の立場ではなく、漂流民など庶民の立場から英学史を構築した。
4. 幕末の英学史を、捕鯨や漂流民と結びつける斬新な発想を貫いた。
5. 福沢諭吉の英学を現在の視点で読み直し、体制維持からの解放を強調した。

審査委員全員が改めて瞠目したのは、この研究が基本的に、400年間におよぶ期間を対象にした網羅的な資料収集に立脚していることである。出版だけでも1978年、1988年、1998年と20年間におよぶ。この関心を持続させ、一切の遺漏なき第一級史料を仕上げようという構想のスケール自体が、すでに画期的である。今日では英語教育といえば道具主義対教養主義という図式の論争に終始するくらいがあるが、川澄論文はそもそも語学教育史という言説を通して文化を見るという抜群の着眼点から説き起こされており、それに米国捕鯨史という一見無縁に映る準拠枠を重ねることで、開国日本の意義をこれまでになくダイナミックに描き出す。原史料をして語り尽くさせるという伝統的方法論に準拠しながら、各章にはさまれた著者独自の「解説」がまことにシャープな歴史観に貫かれているため、読者は当時の日米関係をこのうえなくヴィヴィッドに

再体験することができる。サイモン・シャーマなどに代表される「新しい歴史学」のひとつのありかたとしても、刺激を受けるところは多い。それが福沢洋学の再定義へと向かうくだりは、本書のクライマックスといえるだろう。

ただし、四半世紀にわたる研究であるがために、内容的にはそれだけの資料的価値がありながら、方法的に議論の地盤がずれてしまい、不徹底に終わったところが残っているのも、認めざるをえない。

いちばん肝心な論議は、全体の最後が夏目漱石で終わっているという、いかにも予定調和的な構成の是非をめぐって、戦わされた。そもそも『吾輩は猫である』に関しての言及はおびただしいのに、漱石が英文学から多くを摂取して独自の文学理論を紡ぎ出そうとした最大の成果ともいえる『文学論』がまったく応用されていない。また、漱石が中心になるのはわかるが、野口米次郎への言及はあるのに、まったくの同時代人であり英語圏の学術誌にも発表経歴さえもつ南方熊楠への言及がいっさい見られないのも、いささか不可解との意見も出た。さらに、川澄君は最終章「明治の英語教師 夏目漱石」の最終節を「英学の終焉」と題して、明治39年(1890年)、漱石が東京大学を辞め朝日新聞に勤務する時点において、彼が日本人の英語の教育を「少しでも善き方に進ませるが教育者の任」を放棄してしまったことを重視し、「このとき日本の英文学界は<自己本位>に外国文学を研究する学者を失った。あとは、英語はできるが“something”に欠ける人たちが残った」と結んでいるが、それについても、いまなお英学が終わっていない現在から見ると、いささか奇妙な断定に見える。捕鯨関係の資料収集に関する徹底的努力と漱石をめぐる意外に平凡な批評的判断とのあいだに、少々の落差があるように思われるのである。また、これだけの膨大な史料集成ゆえに、インデックスの不備も気になる。

しかし、このことも含めて、本書の意義は、以後の英学史研究者が必ずふまえ、かつ批判的積極的に継承すべき素材と視点を提供したところにあることは、疑いない。ひとつの可能性を挙げれば、たとえば最近にわかにな注目されている史料として、福沢諭吉が1898年1月26日付でハーヴァード大学総長チャールズ・W・エリオット宛に認めた書状があるが、それは慶應義塾における新しい英文学講座の担当者の派遣を要請するものであり、それに応じて同年5月3日に来日して慶應義塾に着任することになったのが、ほかならぬマシュー・ペリー提督直系の孫にあたるアメリカ文学の専門家トマス・サージェント・ペリーであった。アメリカにおける捕鯨史を背景とした開国日本の立役者の血筋が日本における、それも慶應義塾における英語教育史への積極的な加担者であった事実は、さらに多方面からの調査を要求されており、それはやがて英学ならぬ米学の言説史を構築するのに役立つだろう。そして、そのような新しい研究方向を促進していくに関しても、川澄論文の達成した水準が大きな励みとなるの



はまちがない。この研究は、未来へ向かって大きく開かれているのである。

審査委員一同、川澄哲夫君の論文に対して博士号を与えるのにいささかの躊躇も感じないゆえんは、ここにある。